

選考委員講評

一色 悅子（児童文学者）

武士の敵はだれか、なぜ制止したのか

①はこれまでにない時代物で、歴史を紐解きたくなる。何時代だろうか、向かう敵は誰？いや、むずかしいから現代の話にしたい。

立ち向かうだけではなく、待てという風に制止しているのだ。なぜだろう。じいっとこの選択画を眺めたことでしょう。

時代をしっかりとらえて、はるかな時代に連れて行ってくれたのは、「背を預けて刀を抜く」です。雪の中、敵を前に、互いを信じて緊迫している様子が、タイトルにも込められています。「夜警」は、敵を異形の祭囃子に設定したのが斬新です。赤い体に沢山の提灯飾りをつけた獣とは。行列が葬列というのも不思議な世界です。

「おひな様のために」は、敵をおしいれの人形の大敵の虫にしています。おひな様と一緒にしまわっていた武者人形が活躍するとはおもしろい。

この武士たちを、今の話に飛び越えさせた作品は、それぞれ小道具を使って作為を凝らしています。

「曲者め！」は、武者絵にスマートホンを向けた設定。「ブーム」は江戸ブームで武士を登場させて、松明にはLEDを使っています。

②の選択画はとてもおだやかな水辺のひと時です。そこに偶然に居合わせた人鳥花や草木虫、みんな命でつながっているという視点は、とても大切です。

「アヒルの日記 450日目」はそんなことが「あるあるです」。池でアヒルさんを見つけたら、アヒルさんとは呼ばないでおもいついた名前で呼ぶでしょう。372回もちがった名前をつけられたとは。「春をおとどけ」は絵に描かれていない風の子を登場させ、「そらのさかな」は絵にちょっとぴり浮かぶだけの、さかなのかたちの雲を見つけ出しています。

絵に現実を見て、今を描くことは大事な視点です。「時空兄弟」2025年、戦火の時代から来たのに、やむことなく今も戦火が見えると書いた作品や、敵は熊にしたのだけれど、「ただ少しだけ食べ物を分けてほしかったのです」という叫びを聞きとることは、大切です。

大賞「夜中の侍」は巧みな構成です。一編の童話の本です。1ページの絵本です。熟慮したのでしょうか。

①②の、一瞬を切り取っている絵に、刀で向かうよりも制止に注目し、水辺の安らぎに心を動かされていました。これからもまた、動いた心を一編の童話にしてください。

選考委員講評

石下 典子（詩人）

心で感じ取るもの

一般の部は41都道府県からの応募があった。全国規模の公募として定着している成果と、レベルの向上に目を見張った。絵雑誌『コドモノクニ』『コドモノテンチ』なくして成り立たない本企画は、今後も類似する公募はないだろう。歴史と文化芸術の古河市に本企画はしっかりと根づいている。

創作の着想はまずひらめき。課題画を見て、強く湧き上がるものがないとペンは進まない。課題画①はインパクトがあり、この絵を選んだ時点で、ひらめいたプロットがあったのだろう。しかしまとめるのは難しい。それは①②の課題絵ともに言えることで、結果、類似作が散見された。だからこそ個性あふれる作が選考委員の目に止まることは必然であった。

一般の部大賞は、絵が放つ殺氣を上手に改変して病者を救うという構想。ふたりの侍を絵の外に連れ出して動画のような見せ方は圧巻である。本作は私を含めた複数の選考委員が推し、評価軸はそれでも、会話文が物語を誘導する手腕と完結の手法が大賞を呼び寄せたと思える。

高2中山叶都さんの一反木綿の改心という着想、高1の石崎巧大さんの〈ただ光を／希望に満ちた光だけを見ろ〉の漲る力強さに触れておく。高校生の応募数100件（一般総数417）の中から入選したことは活字ばなれの昨今にあって、明るい未来を予感させる出来事となった。

小中学生の部大賞は「によきによき」と生えてきたお話。絵の女の子が持っているものがジャガイモに見える。あっ、ここから思いついたのだね。やがて咲いた花でピンク色になった表現を〈もものじゅーすみたい〉ここが良い。しかもそれを飲んだアヒルがフラミンゴになった自在性には、お話作りを楽しめた感がある。私は小2若狭早さんの「春をおとどけ」を押した。課題画とお話の絶妙な距離感に優れ、〈今年も元気な風をありがとう〉と春を届ける希望の始まりはみんなの胸を緩めてくれる。課題画に付き過ぎず離れ過ぎないお話作りの難しさをやすやすとこなした基盤に、生得的なものや敏感な感受性・優しさがあった。創作の原点には日頃の発見や感動が重要で、心で感じ取った手応えは揺るぎない。これは小学低学年の作品に顕著であり、いわゆる「9歳の壁」を感じることとなった。教育現場では子どもの発達段階上の節目を称しているようだが、今回の作品においても、純真に捉えた物事を巧拙ぬきの素直な表現ができる貴重な年限に触れられたことは、一選考委員として最良の喜びであった。

多彩な世界が

一枚の絵から物語を紡ぎ出す。まずはじっくりと絵を眺め、想像力を働かせ、発想していく。インスピレーションもあるだろう、直感で構想ができ上ることもあるかもしれない。多くは何度も何度も繰り返して物語を練っていく。そしていよいよ文章に起こしていく。

たった300字の枠のなかに、作者の思いを集約していく。さらに文章としてのさまざまな技巧が詰まっている。もしかしたら作者の人格まで見えて来る。

毎年毎年、何百もの作品世界が生み出されていることに驚くばかりだ。

侍の絵は、特定の物語の挿絵のようでもあり、独自のイメージで物語を生み出すのは難しいのではないかと思ったが、蓋を開けてみるとそんなことはなく、多彩な物語が紡ぎ出された。

大賞の「夜中の侍」は物語と現実が入り組んでいて巧みだ。

準大賞の「曲者め！」も絵の中の侍と現代の少年との対比がテンポよく描かれる。スマートフォンを持つ少年が、絵の中の侍から見ると〈異世界の住人〉のように見えるという視点も見逃せない。「つわもの二人」は、言ってみれば火焔地獄のなかに飛び込む水と風という設定。「侘助」は、小説になりそうな奥行きを持っている。

小中学生の部の大賞「によきによき」は、じゃが芋がによきによきと芽を出し、花がによきによきと咲き始めるとても楽しい話。

「まほうのビスケット」は、ビスケットを食べて人間に変身したあひるの話。人間になって楽しかったけれどやっぱりお父さんお母さんの居るところがいい。

二人とも小学校1年生。イメージが豊かで、しかも文章もしっかりしている。普段から読書の習慣があるのかもしれないと思っている。

準大賞の「おひな様のために」はお雛様を守るために侍が虫と戦っているという設定。3月の雛を守る侍、その侍の祭りである端午の節句に及んでいるところが豊か。

「またね」は、少し変わった作品。笑顔のやり方を忘れてしまったという設定。池のほとりで遊ぶときには少し笑顔のやり方を思い出す。単に〈笑顔〉ではなく、〈笑顔のやりかた〉という屈折した言い方を選んでいる。笑顔のやり方がわからなくなる前に〈またね〉という。中学2年生だが、会話のような文体と全部ひらがな書きで、幼さを出している。

いずれも力作で、毎年レベルが上がっているように思う。

選考委員講評

金田 卓也（大学教授）

創作には定められたゴールがない

今年も、一般の部も小中学生の部もたくさんの応募作品がありました。この「1ページの絵本」が着実に発展し、嬉しく思うのと反面、数多い応募作品の中から、入選作品を選ぶことの難しさというものを痛感しています。

たとえば、50m走といった競走であれば、最初にゴールに着いた人が一番であることはいうまでもありません。しかし、この「1ページの絵本」で優れた作品を選ぶとき、評価の基準となる到達しなければならないゴールというものが明確に定められているわけではないのです。

描かれた絵とはまったく別の世界でストーリーが展開するファンタジー的な作品もありますし、反対に、候補作品の絵を現実の日常生活と重ね合わせながら創作した、一種のリアル感に根差した作品もあります。このように、現実世界から離れた作品、現実の世界に即した作品、それぞれに良さがあるわけです。

今回は太田三郎の戦う侍の姿を描いた絵が候補のひとつでした。このような時代ものからインスピレーションを得て新しいストーリーを創作するのは難しいかもしれないと考えていたのですが、応募作品を読んでみると、歴史の一場面を新たな視点から描いたものや歴史的な視点と現代的な視点を交錯させたものなど、予想に反して、面白い作品が数多くありました。

一般の部の大賞と準大賞の作品は太田三郎の絵をもとに創作されたものです。大賞を受賞した岬とうこさんの「夜中の侍」では、作品の中で過去と現在、そして未来がうまく重なり合って展開する構成になっています。準大賞のいっきさんの作品「曲者め！」も同様に過去と現在が交わる作品です。時空を超えた両作品共、歴史博物館に隣接する古河文学館の企画にふさわしいものといえるでしょう。

小中学生の部大賞の山中俐弦さんの「によきによき」は、福与英夫の絵を選び、桃のジュースみたいな色になった湖の水を飲んだアヒルさんの羽がピンク色になってしまいうとい小学一年生らしいイマジネーションあふれた作品です。準大賞の小学四年生、渡邊千優さんの「おひな様のために」は、太田三郎の絵の中の二人の侍をお雛様の人形を守る姿で表現しています。「満を持して」や「見事な刀裁き」といった難しい言葉もうまく使われています。

今後も、子どもならではの発想、十代らしい考え、経験を積んだ大人の表現といったように、それぞれの年齢に応じた素晴らしい作品が続くことを願っています。

豊かな物語性をたのしむ

今回も、大勢の方からの応募があり、楽しく拝見させていただいた。課題の絵の内容にもよるが、思わぬ物語の展開にしばしば惹き込まれての選考だった。まずは、応募されたすべての皆様にありがとうございます。

まず、一般の部。大賞は岬とうこさんの「夜中の侍」に決まった。私自身も一推しの作だったが、的確な文章による物語の展開性、スピード感、せりふに見る登場人物の性格付けの確かさ、実と虚の世界の移動、など作者の世界にすっかり惹き込まれてしまった。準大賞はいっきさんの「曲者め！」に。歴史画展でのスマホでの撮影という設定に物語の独自性が光っていた。歴史画の中の人物も、スマホの少年も、時間を隔てながらも共に生きている。今回、選択画①(太田三郎作)に入選作が多くなったが、想定外の面白い物語性を得たことに驚いてもいる。

次に、小中学生の部。大賞はけっこうな接戦の上、中山俐弦さんの「によきによき」に決定。小学一年生ののびのびとした発想にほんとうにたのしくなりました。はじめのほうは、おんなのこからもらったじゃがいもをあひるさんがみずうみのなかにうめると、じゃがいもがによきによき。みんなでたべられるようになります。こころのひろいあひるさん。つぎに、おはなもうめてみると、たくさんのおはながさき、きれいないろのみずうみになります。おはなのじゅーすをのむと、あひるさんはびんくいろになります。「ふらみんごになっちゃったあ。」もみんなびっくりしながらもうれしそう。みんなのちの「によきによき」におどろいて、よろこんで、こころがゆたかになったようでした。準大賞は、渡邊千優さんの「おひな様のために」に決まりました。端午の節句を待っていた二人の侍がおひな様のために人形の大敵である虫たちを退治するというお話。人形には人形たちの世界があって、その中で助け合い心を通わせ合っている、という心あたたかな物語でした。

入選作の中では、私は高松歩花さんの「僕の色」に惹かれました。作者は中学二年生ですが、自分のいのちを取り巻く生まれた頃からのもやつとした世界からしだいに育って、やがていろどりの世界に移るまでを、絵の主人公の白いあひるの子の夢見のように物語を展開したところに共感しました。まだ推敲はできそうですが、中学生ならではの、不分明の世界をもがきながら把握していくような物語になりました。他にも、入選作にはそれぞれ独自の発想が見られ、心豊かな物語になりました。心よりおめでとう。